

「停滞」のあとの「飛躍」

立ちはだかった分数の「カベ」

小3から通信教育の形で「らくだ」のプリントで学び始めたH君（現在中1）は、高知県に住んでいます。中1のプリントも終わって中2のプリントにさしかかることになるにあたり、「ずっと『らくだ』でやってきたので、少し休んでみたい」とのこと、今は休会中です。

他の「らくだ」の指導者の方の通信生だったH君の指導を私が引き継ぐことになったのは、彼が小4の6月でした。この時彼は、小4のプリントの最後の方の分数の「約分」のプリントをやっていました。この「約分」のプリントは、最初は簡単でも、途中からかなり難しくなります。大人でも、目安時間内にやるのは結構しんどいプリントです。

「約分」というのは、分母と分子の二つの数字を見て、その二つの異なる数字に共通する約数を瞬時に見つけなければなりません。また、見つけたと思ったら「まだ割れる」ということがあるわけで、最大公約数を瞬時に見つけた方が手間が省けます。

H君は、約分の前の、分母が同じ分数の足し算引き算のあたりから少し難しくなってきたようで、一枚目は時間を計らずにやって、そのあと時間を計ってやるようにしていました。

でも、約分のプリントの途中から、時間を計らずにやる枚数が増え、したがって、一種類のプリントを繰り返しやる枚数が増えて、なかなか先に進まなくなりました。

それでも何とか約分の「カベ」を越えて小5の最初の方（小4までの復習なので、足し算・引き算・かけ算・割り算から、同分母の分数の足し算・かけ算、約分までが混ざっている）にたどりついたので

すが、どうにもしんどくなったのか、やれない日が増えてきました。やれている時も、時間を計らずにやっていて、時間を計ってプリントをやる日が少ないので

す。

前の指導者から引き継いだ記録表を見ると、小4の「÷2ケタ」の割り算までは、「目安時間内にやれて、ミスは3個以内」という次に進んでいいかどうかの判断基準を「順調」にクリアして前に進んでいました。ただ、「順調」に進んでいることが、果たして本人にとっていいのかどうか、それで本当に力がついているかどうかはわかりません。それよりも、この立ちはだかった「カベ」はH君が本当に力をつけるチャンスと考えた方がよさそうです。

楽なやり方でやり続けてみる

引き継いでから私が送ったのは小5のプリントで、異分母の分数の足し算・引き算になり、かなり難しくなります。ある時、電話で、H君は「小5の後の方はつらいなあ」と言いました。また、お母さんから、「学校で『復習するように』と言われた」とお聞きしたことや、時間を計らなくなっていること、丸つけミスが結構あること、答えを写しているように見受けられるところもあることなどから判断して、先に進むよりも、「楽なところにでもどる」ことを提案してみました。

H君にどのあたりにもどりたいか聞いてみると、「割り算の横式から復習したい」とのことだったので、小3-16という、「 $6 \div 2$ 」や「 $160 \div 4$ 」など、あまりのない割り算が120問あるプリント（目安時間3分）までもどりました。ところが、お母さんから、声をかけてもやらない日が増えたというお電話をいただき、H君と直

接電話で話すと、どうもやるのがしんどそう。でも、「4分ならやれる」ということだったので、「4分でストップして、やれなかった問題はミスとして数える」という形でやることにしてみました。

しばらくはそのやり方でもできず、時間を計らないままだったのですが、それでもやる日数は増え、1ヶ月ぐらい経つからは4分でストップするか、1枚全部やるかでだいたい毎日できるようになってきました。

そういうた試行錯誤の後、「目安時間+1分でストップして、できなかつた問題はミスとして数える。どうしてもできそうにない日は、4分とか5分といった短い時間でいいからやる。一枚全部をやって目安時間内でミス3個以内になれば次に進む」という形で、再び小5の最初の方に来て、以前越えられなかつた「小4までの復習」の「カベ」を越えることができました。引き継いでから10ヶ月後のことです。

えんえんと停滞したあとに

次なる「カベ」は、「異分母の足し算・引き算」です。これは、「通分」をしないといけませんから、最小公倍数がパッと出てくるかどうかが重要です。

H君は、小5-10や11まで進んでは、しんどくなつて小5-7や8にもどるということを繰り返し、またもやプリントがやれない日が続きました。

そんなある日、H君は、「小5-9のような最小公倍数を求めるだけのプリントを、小5-10や11の分数の足し算に出てくる分母の数字で作つてほしい」と言いました。小5-9では、「(4, 6)→()」という形で、4と6の最小公倍数を答える問題が並んでいますので、小5-10で分数の足し算をやる前にまず、そこに出でてくる分母の組み合わせで最小公倍数を求める練習をしたい

ということでした。

そこで、最小公倍数を求める問題ばかりのプリントを、30問、45問、60問と3種類作り、それをH君は一ヶ月ほどやり続けました。私からすれば、「もうそのぐらいで練習はいいんじゃない? 分数の足し算で練習すれば?」と思うのですが、H君は自分の納得いくまでこの3種類のプリントを繰り返しやつたのです。

その後、再び小5-10をやり始めたのですが、長い時間はやれず、4分や5分でストップしながらやるというのを織りませながら、ゆっくり進んでいきました。これも、お母さんや私から見れば、「もう1枚全部やれるんじゃないの?」と思うのですが、本人の納得のいくペースで進んでいきました。

そうやって、一旦小5のプリントにさしかかった時からすれば2年ほど経つ、小5-25という、高校の数学の先生でも初めてやるとクリアできなかつたという難しいプリント（分数の足し算・引き算のまとめ。約分や仮分数を帶分数に直す問題もある）をやることになったH君は、なんと1枚目ですんなりクリアしたのです。この時の記録表にお母さんは「小5-25もすんなりできました。本人も驚いていましたが、今まで停滞しているように私からは見えていたのは、十分地がためが出来ていたのかなと思いました。Hに『すごいね』と言つたら、『そういうふうに考えてやつた!』と言うので、見た目ではわからないものだなあと思いました」と書いておられます。

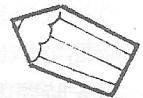
その後のH君の進み具合は早く、小6や中1のプリントもかなり難しいのですが、小5-25をクリアしてから1年かからずに中1の終わりまで進んでいます。

一見「停滞」に見えて、それは「地がため」であつて、「停滞」のあとにこそ「飛躍」があるのだと実感したのです。

「らくだ」をやっててよかったと思うのは、
「とにかくやる」が身についたこと。
受験でも、自分で「とにかくやる」しかないから、
「まずスタートする」「まずやってみる」、そして、
「できなかつたところ」「間違えたところ」を見る。
そして、できるまでくり返しやる。
大学入試は、「自分で勉強する」ということが前提。
「与えてもらうこと」に慣れているとしんどいですね。

生徒さんの生の声を紹介するコーナーです。今回は、小2から「スペースわん」で学び、先日、関西大学のAO入試に合格したAさん（高3）の言葉です。合格前と合格後に話してくれたことの両方を編集しています。小学生のころ、「スペースわん」に来ても、「いややん、いややん」とプリントをやらず、ゴロゴロしていたこともあります。でも、「じゃあプリントせんと帰る？」と聞くと、「そんなん、来た意味ないやん」と言い放つて、しばらくしてからやり始めたのでした。

AO入試で合格しちゃったけど、合格が最終目標じゃないから、
一般の入試で入学して来る人たちと一緒にスタートラインに立つために勉強しようと思い、
センター試験も受けます。
勉強することに義務感を感じなくなって、もっと勉強したいと思うようになったかな。
そもそも、勉強はキレイやった。
だいたい学校の先生の説明は「わかってる人の説明」だから。
今は、「継続は力なり」を実感しています。



らくだ教材で学ぶ塾 スペースわん / 幼児から大人まで 年齢不問